

聖書：ヨハネの福音書 11：17～27

説教題：よみがえりであり、いのちである主

日時：2021年4月4日（朝拝）

ここはマルタとマリヤの兄弟ラザロの生き返りが記される箇所です。昨年11月にジェフ宣教師が11章1～6節までの箇所から説教してくださいました。その時に読みましたように、イエス様はラザロが病気だと聞いてもすぐには出かけませんでした。6節に、なおその場所に二日とどまられたとありました。そうしている間にラザロは死んでしまいます。イエス様は意地悪されたわけではありません。これは神の栄光のためのものであると4節で言うておられました。また5節にマルタとその姉妹とラザロを愛しておられたからであるともありました。イエス様は彼らの真の益になるように、あえて困難の中に一時的に置くようにされたわけです。そうしてイエス様が到着したのはラザロが墓の中に入れられて、すでに四日経っていた日でした。

この4日目という日にちには意味があったと考えられます。ユダヤ人の中では、死後3日間は死んだ人の魂が肉体の近くを漂っていて、再び戻る可能性があるという考えがあったようです。しかし4日目ともなれば、その可能性はなくなる。パレスチナの暖かい気候のもとでは確実に死体は腐敗し始める。そんな状態のからだに魂が戻って来ることはない。実際マルタはこの後の39節で、墓の石を取り除けなさいと言われたイエス様に対して言っています。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」イエス様はこのような日にあえて到着するようになさったのです。もしかするといのちに戻って来るかもしれないというかすかな希望も消え失せ、いよいよ死の力が重くのしかかる日、絶望が確定する日に到着されたわけです。

18節に「ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった」とあります。15スタディオンは、欄外の注にあるように約3キロメートルです。このようにエルサレムに近いこともあって、19節にある通り、そのエルサレムからでしょう、大勢のユダヤ人たちがマルタとマリヤのところに来ていました。この多くの人々の前でラザロの生き返りの奇跡が行われることになります。多くの目撃証人がここにいたことになります。またこの18節の注釈は、イエス様の十字架の死がいよいよ間近に迫っていることも暗示していると思います。イエス様はエルサ

レムで私たちの身代わりにご自身のいのちをささげるといふ尊い贖いのみわざをされます。その力をもって、ここに記されるみわざも行われたということです。

さてイエス様が来られたと聞いてまず出迎えたのは姉のマルタでした。マルタとマリヤと言えばルカの福音書 10 章 38～42 節のエピソードが有名ですが、あの箇所を示されている通り、マルタは行動的な人です。彼女は姉として、またこの場を仕切る女主人として、先にこの知らせを聞きつけ、イエス様を迎えに行きます。そうしてイエス様とやり取りした言葉がここに記されています。まずマルタが話した言葉に注目したいと思います。

マルタはイエス様に 21 節でこう言いました。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」これはどんなニュアンスの言葉でしょうか。早く来てくださるようお願いしたのに、遅くなったことを咎めている言葉でしょうか。恨み言なのでしょう。かつてイエス様さえも叱りつけたあのマルタなら、そうかもしれないとも思いますが、この後の彼女の言葉を見るとそうではないようです。彼女はイエス様に対して腹を立てておらず、むしろ恭しくイエス様に服従しています。また後の 32 節のマリヤの言葉と全く同じであることも注目に値します。おそらく二人の姉妹はイエス様が来るまでの間、互いにこの言葉を言い合っていたのでしょう。それはイエス様を責める言葉と言うよりは悲しみの率直な表現であったと考えられます。主がいてくださったら、死ななかつたらうに、・・・と。またそれは同時に主への信仰の表現でもありました。主がいてくださったら、主にはそのことができたはずであると。

マルタは 22 節でこう続けます。「しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」これは一見、イエス様がこの状況を今からでも何とかして下さる！ラザロを生き返らせてくださる！という彼女の期待を表すもののように読めなくもありませんが、そうでないことは先ほど触れた 39 節から明らかです。マルタはラザロがいのちに戻る可能性は全く考えていません。では彼女は何を考えていたのでしょうか。はっきりは分かりません。これは彼女なりの精一杯の信仰の表現だったと思います。イエス様がここにいてくださったらラザロは死ななくて済んだ。それはかなわなかった。しかしだからと言って私はあなたへの信仰を捨てたわけではない。私は今でもあなたが神と特

別な関係にあり、あなたが願うなら神は何でもその願いに答えてくださることを信じている。そのような告白の言葉であったと考えられます。

そんな彼女にイエス様は 23 節で「あなたの兄弟はよみがえります」と言われます。この後から分かることは、イエス様の意味はラザロを今ここで生き返らせるということです。しかしマルタはそのようには受け取りませんでした。24 節：「マルタはイエスに言った。『終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。』」 ユダヤ人の中には終わりの日の復活についての信仰がありました。聖書から分かりますようにサドカイ人らは否定していましたが、パリサイ人たちはこれを信じていました。おそらくマルタとマリヤのもとにやって来た多くのユダヤ人は、この言葉をもって彼女たちを慰めたのでしょう。あなたの兄弟はよみがえりますよ。終わりの日には復活させられますよ、と。そしてマルタは今イエス様からも同じ慰めの言葉を聞いたと思ったのです。ですから、はい主よ、私は終わりのよみがえりの日に私の兄弟がよみがえることは知っています、と答えました。このように彼女は復活の希望を遠い将来と結びつけて考えていました。そんな彼女に今日の箇所を中心となるイエス様の言葉が語られます。そのことを次に見て行きます。

イエス様はまず「わたしはよみがえりです。いのちです」と言われました。注目すべきは、ここで単に「わたしはよみがえりを与えます。いのちを与えます」と言われたのではなかったということです。イエス様は「わたしがよみがえりであり、いのちである」と言われました。つまりこれはよみがえりといのちはイエス様ご自身に集中し、この方とこそ結びついているということです。このイエス様から離れてはよみがえりもいのちも見出せない。これらを求めようとするなら、イエス様にこそ尋ね求めなければならない。なぜならイエス様こそよみがえりであり、いのちであるからです。イエス様はこの信仰へとマルタを導いておられます。マルタは 24 節でよみがえりを信じているとは言いましたが、その目は遠くを見ていました。遠い将来にそのことは起こるといふ漠然とした希望を持っているに過ぎませんでした。彼女はラザロが死ぬまではイエス様に目を注いでいました。イエス様がここにいてくださったら私の兄弟は死ななかつたでしょうに！と彼女が言った通りです。しかしラザロは死にました。その死の前ではもはやイエス様にも何もできない。他に色々できたとしても、・・・と彼女は思っています。そしてマルタの目は遠い将来を見つ

めていました。良くは分からないが終わりの日にラザロはよみがえらせていただけるといふ漠然とした望みを抱いていました。そんな彼女にイエス様は「わたしがよみがえりであり、いのちである」と言われて、目の前にいるご自身にこそ目を注ぐようにと導かれたのです。

なぜイエス様はご自身をこのように言うことができるのでしょうか。それはイエス様だけがこれをもたらせる唯一のお方だからです。すべての人は神に対して犯した自分の罪への報いとして最後には死を刈り取らなければなりません。そこから自分を救い出せる人はいませんし、よみがえることができる人もいません。イエス様はそんな私たちを救い出すために地上に来てくださいました。罪のない、聖い神の御子であるお方が、ご自身をへりくだらせて人となり、私たちの身代わりとなられた行為は無限の価値を持ちます。イエス様は私たちの罪の呪いをすべてご自身の上に引き受け、ついにはその尊いいのちさえも投げ出すことを通して、罪と罪がもたらす死の力とを粉碎してしまわれ、この日によみがえられました。これができるのはイエス様だけです！ですからこのイエス様にこそ、そしてイエス様にだけ、よみがえりと真のいのちはあるのです。そのお方に信仰の目を向けるようにとイエス様はマルタを招いたのです。

イエス様は続いてこう言われました。25 節後半：「わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」 イエス様のよみがえりはご自身のためものではありませんでした。これらはすべて私たちを救うためのみわざです。この祝福にあずかるためにイエス様は他に何も求めませんが、ただ信じることのみを求めておられます。イエス様により頼むだけで OK です。そうする時、私たちの上にあった罪の呪い、また死の力は打ち破られ、イエス様が勝ち取ってくださった祝福に生きる者とされます。たとえ周りの人々と同じように地上の人生の最後に死を経験し、その力の下に一時的に服したとしても、それを乗り越えて生きる者とされます。死を打ち破った方、わたしはよみがえりであり、いのちであると言われる方が、「死んでも生きる」という祝福に生かしてくださいます。

そして 26 節はさらに話を前進させるものです。26 節前半：「また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。」 一見、前の節とうまく一致しないように思う方もいるかもしれませんが。前の節では「死んでも生きる」

と言われ、死ぬことが前提にされていました。ところがここでは「決して死なない」と言われています。これはどういうことか？と思うわけです。しかし良く考えれば分かると思います。イエス様は「わたしはよみがえりです。いのちです」と言われました。ですからそのイエス様に信頼し、イエス様と結ばれる人は、今日ここにある時からその力に生かされ始めるのです。死んでからしかこの祝福にあずかれないではありません。今日、招詞で読んでいただいたヨハネの福音書5章24節にこうあった通りです。「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」これは現在、私たちが味わうことができる祝福を語っているものです。このことはもちろん私たちが肉体的に死ぬことがなくなるという意味ではありません。へブル人への手紙9章27節に「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とあります。先に見た25節の「死んでも生きる」の「死んでも」という言葉にもそれは示されています。しかしイエス様と結ばれた者にとって死はもはや以前までのような恐るべき出来事ではなくなりました。それは天の御国の生活へ入るためのドアを開けるようなことであり、そのための一つの通路を通るような出来事でしかありません。クリスチャンはキリストにあって何ら損害や損失は受けません。私たちは肉体的な死を経験する前からイエス様にある永遠のいのちに生かされ始め、肉体的な死を通ることがあっても、それによって本質的なものが奪われることはありません。すでに持っている真のいのちに生き続けます。そういう意味で決して死ぬことはないと言われているわけです。

イエス様は最後に「あなたはこのことを信じますか」と問うています。先にも触れましたように、イエス様は他には何も求めていませんが、ただ信じることのみを私たちに求めています。いらないと言ったり、どっちでもいい等と言う人には、その人格を尊重して無理やりに押し付けません。このイエス様の言葉を受け止めて「信じます」と告白し、感謝してイエス様と結ばれることを願うすべての人にこの祝福は差し出されています。

私たちは今日の箇所から2つのことを特に心に留めたいと思います。イエス様はこのイースターの日、死より復活され、私たちの罪をすべて清算し、私たちの上にあった死の力を粉碎して、よみがえりといのちをもたらす主とされました。その

方によって私たちには「死んでも生きる」という最高の祝福が備えられました。世の多くの人々は死んだら終わりだと思っています。あるいは死後に何らかのいのちがあると思っている人々でも、それは漠然としたものにしかならず、根拠のない単なる願望のようなものでしかありません。しかしイエス様は私たちの身代わりに死に、よみがえられた主として、はっきり仰っています。「わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」 この幸いを感謝して受け取って、喜びをもってイエス様に従う者とされたいと思います。

そしてもう一つ今日の箇所から教えられることは、復活の祝福は今日ここにある時から味わうことができるということです。死んでから初めて味わうものではありません。イエス様は「わたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがない」と言われました。よみがえりであり、いのちである主と結ばれるなら、その祝福は今日、私たちが味わうことのできるものです。

これは私たちの毎日の生活への見方を大きく変えるものだと思います。この世にあって私たちは多くの苦しみ、困難、悩み、試練があります。その中で泣きたくなること、涙したくなるような時も多々あるでしょう。しかし私たちはこの世にある間は弱々しい力に生き、死んでから力強い復活の力に生きるのではないのです。そうではなく、この世にある時からキリストの復活の力に生かされて歩むことができます。私たちはこの世にあって色々な困難は避けられませんが、そしてその終点とも言うべき肉体的死も経験しなければなりません、それらをはるかに凌駕するキリストの復活のいのちに支えられ、生かされ、強められて歩むことのできるのです。色々な困難を前にしつつもキリストの復活の力で対処し、それを必ず乗り越えて行くことができるのです。「決して死ぬことがない」という生き生きとしたいのちに生きることができるのです。そのために必要なことは「わたしはよみがえりであり、いのちである」と言われる主に結び付くことです。この幸いはただ主にこそあります。主だけが与えることのできるものです。主は「あなたは、このことを信じますか」と一人一人に問うています。その主に今朝改めて「信じます」と応答し、主と結ばれ、主と交わり、主に従う歩みへ導かれたいと思います。そして主がくださるよみがえりといのちの祝福を今ここで経験させていただき、それによって強くされ、その幸いをむしろ様々な困難の中で深く味わわせていただいて、やがての御国へそのままつながる主の救いと祝福の道を歩む者とされたいと思います。